【研究ノート】

若者論の系譜
――若者はどう語られたか――

市　川　孝　一*

A Review of Studies on Youth and Youth-Culture in Post-War Japan

Koichi ICHIKAWA

The purpose of this paper is to review books, articles and essays on youth and youth-culture in post-war Japan. People born after World War Ⅱ are divided into four generations, according to the time when they become adolescent.― 1960's: Dankai-no-Sedai (first baby boomer in post-war period), 1970's:Shirake-Sedai (apathy generation), 1980's:Shinjinrui-Sedai (new-species generation), 1990's:Dankai-junior Sedai (second baby boomer in post-war period).

Characteristics of each generation are described as follows: Dankai-no-sedai: spirit of resistance and protest, Shirake-Sedai: apathy and moratorium, Shinjinrui-Sedai: super-individualistic, ego-centric, Dankai-junior-Sedai: indifferent to others, lack of imagination.

These characteristics and traits have been gradually generalized as those of common Japanese in later times. And Japanese mass-culture has been influenced by youth-culture. Youth and youth-culture is a significant indication of future images of people and culture in general. It is the reason why we examine the changes of these features.

はじめに

古代の遺跡から発掘された文字を解読したら、「いまどきの若い者は…」と書かれていたという小話風の有名なエピソードがある。先行する世代にとって、若者は「違和感」を抱かせる存在であり、常に批判の対象となってきた。そうした不平・不満を含めて、いつの時代にも若者については多くのことが語られ続けている。時には、若者論のブームとなることもある。

そして、それらの若者について語られたこと、若者に関する言説にはそれぞれの時代の特質や人々のものの考え方や感じ方が反映されている。逆に言うと、若者論や若者文化論を通して、「時代」の変遷を見ることも可能であるということになる。

本稿は、まず戦後の若者の時代的変遷の概略を追った上で、それぞれの世代について語られた代表的な若者論・若者文化論の論点を整理し、上記の目的の一部を明らかにしようとするささやかな試みである。

戦後若者史の概略

戦後の若者の歴史・若者現象の流れを跡づ

* いちかわ　こういち　文教大学人間科学部人間科学科

けるときに、有効なものに「世代」と「～族」という概念がある。世代とは言うまでもなく生年や成長期を共通にする人々の集まりであるから、若者現象を大きく括る場合には便利である。族はそれに対し、個々の流行現象などと結びついたもう少し小さな区切りとなる。

ここでは、大きな流れをおさえることが目的なので、「世代」の方を採用することにする。戦後生まれの人間に限定すると、戦後から今日に至るまでの代表的な「世代」として一般的に認められているものはそれほど多くない。「団塊の世代」「シラケ世代」「新人類世代」「団塊ジュニア世代」である[1)]。彼らが青年期（若者期）を迎えた時代に対応させるとそれがちょうど10年刻みの時代区分に対応していて、それぞれ1960年代：団塊の世代、1970年代：シラケ世代、1980年代：新人類世代、1990年代：団塊ジュニア世代となる。

団塊の世代は、戦後の世代のなかでは最も知名度も注目度も高い世代である。敗戦直後の結婚ラッシュの結果生まれた戦後の第一次ベビーブーム世代である。狭義では、1947（昭和22）年から1949（昭和24）年の3年間に生まれた人々を指すが、広く敗戦後から1950（昭和25）年生まれまでを含めて呼ぶこともある。

「団塊の世代」という言葉の生みの親は作家・評論家の堺屋太一で、1976年に出版された同名の近未来小説のタイトルに由来するという話もよく知られている。この“大きな塊の世代”というのは実にうまいネーミングで、この3年間の出生数は合わせて約800万人に及び、人口グラフなどを見ると一目瞭然だが、文字通り量的に突出している。

なお、この世代は1960年代末から1970年代はじめにかけて全国の大学で吹き荒れた「学園紛争」の主要な担い手であったことから、別名「全共闘世代」とも呼ばれる。

1970年代に若者期を迎えるのが、主に1950年代後半生まれの「シラケ世代」である。彼らは先行する団塊の世代と後続の新人類世代の間に位置するということで、別名「谷間の世代」とも呼ばれる。前後の世代に比べるとインパクトには欠ける、いわば地味な世代である[2)]。

「シラケ」というのは、もちろん彼らの意識・メンタリティ全般に当てはまる特性だが[3)]、とりわけその「シラケ」が集約されるのが政治意識である。彼らが大学生としてキャンパスに登場するのは、「学園闘争」が敗北という形で終焉を迎えた直後のことである。彼らは学生運動の負の側面を十分見聞きしてきたので、意識的に政治的なものからは距離を置こうとしたのである。その文脈でとらえれば、彼らは「ポスト全共闘世代」ということになる。

1980年代に注目を浴びたのが、新人類である。新人類世代は、1960年代生まれで生まれたときから高度成長期の豊かさを所与の前提とし、幼児期よりメディアに囲まれて育った人々というかなり大きな括りでとらえられている。「新人類」という言葉自体は、1986年に日本新語・流行語大賞を受賞し、誰にも広く知られるようになった[4)]。

このように「新人類」という言葉が浸透していったのは1980年代の後半だが、言葉のルーツはもう少しさかのぼることが出来そうだ。1985年の4月から、今はなき『朝日ジャーナル』で「新人類の旗手たち―筑紫哲也の若者探検」という連載が始まっている。この連載対談にはさまざまなジャンルで活躍する若者たちが登場したのだが、このタイトルが「新人類」という言葉の発生源の一つだというのが、ほぼ定説となっている。

それにしても、この「新人類」というネーミングは衝撃的であった。何しろ、今までの若者たちとはまったく異質な今までには存在しなかった「新人種」が登場したというのであるから。

なおこの新人類世代には、もうひとつ重要なカテゴリーが含まれていることを忘れてはならない。いわゆる「オタク」である。「新人類」と「オタク」の違いについては、後でふれることになるが、この言葉の場合は命名者

がはっきりしている。評論家の中森明夫氏が1983年に書いた雑誌記事の中で、コミックマーケットなどに集まるアニメファンに対してこの名を与えた。彼らが、同好の士に語りかけるときに「おたく」と呼びかけるところがその名の由来である[5]。オタクは『広辞苑』（第5版、1998）にも登場し、次のように説明されている。―「④（多くの場合片仮名で書く）特定の分野・物事にしか関心がなく、そのことには異常なほどくわしいが、社会的な常識には欠ける人。仲間内で相手を「御宅」と呼ぶ傾向に着目しての称」。

そして、1990年代の団塊ジュニア世代の登場である。「団塊ジュニア」の名前が示すとおり、彼らは団塊の世代の子どもたちに当たる世代という意味である。別の言い方をすると、1971（昭和46）年から1974（昭和48）年にかけての戦後の第2次ベビーブームに生まれた人々をさす。この4年間にはいずれも、出生数が200万人を超えている[6]団塊ジュニア世代の特徴は、団塊の世代と同様まずはその数の多さにある。量的な大きさはそれ自体がパワーと影響力を持つからである。団塊ジュニア世代の特徴は、さらに「他者への無関心」「自分探し」などのキー・ワードでも表されるが、際立っているのは「性意識と性行動の特異性」である。

「ブルセラ」「援交（援助交際）」など、マスコミでもセンセーショナルに取り上げられた彼女たちの「奔放な性」は、先行世代に大きな衝撃を与えた。この世代の性行動と性意識は、それまでの（近代以降の）伝統的な日本人のそれとの間に大きなギャップがあり、他の領域には類例のない劇的な変化を示したのであった。

若者文化論の系譜

以上、戦後生まれの若者の世代的変遷の大きな流れを簡単に見てきたが、それぞれの世代の若者たちに対応する形で、彼らの行動特性やメンタリティを論じる若者論・若者文化論と呼ばれる言説が提示されてきた。若者論・若者文化論と呼ばれるものには、専門的な学術研究からエッセイにいたるまでおびただしい数の著書や論文がある。本小論ではもちろんそれらのすべてを網羅することは出来ない。そのほんの一部の「代表的若者論」として定評のあるものを中心に取り上げ、それぞれの世代の若者たちがどのように論じられてきたかのポイントのみを見ていくことになる。

(1)「団塊の世代」論

まず、団塊の世代を論じたものとしては、若者文化論の名著・井上俊『死にがいの喪失』（筑摩書房、1973年）を取り上げたい。特に、「離脱の文化―若者文化への視角―」という論文に注目したい。この論文は、そもそも「若者文化」とは何なのかという若者文化の基本的な位置づけとその本質を解明する示唆に富む論考である。

若者文化（youth culture）とは、まず「若者世代に特有の行動様式や価値観のパターン」だと規定される。そして、若者文化が大人文化（adult culture）と異なる点は、若者文化が「離脱」のカルチャーであることである。それゆえ、若者文化は大人文化を支配している原則から相対的に自由でいられるのだという指摘がある（同書、45頁）。

この議論自体は、若者文化を大人文化＝支配的文化（main culture）の単なる副次的な下位文化（sub-culture）ではなく、大人文化に積極的に対峙する対抗文化（counter culture）とみなすよく知られた議論と重なるものである。井上説のユニークなところは、これを聖―俗―遊の3項図式によってとらえたことである。

功利原則と現実原則にもとづく既存の支配的大人文化は、もちろん「俗」に対応する。そこからの離脱のひとつの方向は、「まじめ」「当為」「理想主義」などによってあらわされる「聖」の次元である。もうひとつの離脱の方向は、「遊び」や「自由」に代表される「遊」の次元である。別の言い方をすると、前者は「反」という言葉で、後者は「脱」という言葉

で表すことが出来る（同書、45-50頁）。

既存の政治や制度への全面的な「異議申し立て」であった学生運動（とりわけ全共闘運動）は、言うまでもなく「聖」の方向へ向けての離脱、つまり「反」の典型であった。一方、フーテン（日本版ヒッピー）やドロップアウト現象は、「遊」の方向への離脱、「脱」の典型とみなされる。

この井上の論考でもうひとつ注目すべき点は、“若者の「未決」意識”への言及である。就職をためらう学生が増えていることにふれて、それを“「既決」になること、大人になることを出来るだけ先にのばそうとする傾向”、“「未決」であることへの執着”ととらえている（同書、63頁）。この指摘は、次の世代に対して集中的に出てきた「モラトリアム論」のさきがけととらえることが出来る。

同時代の若者論ではないが、岩間夏樹『戦後若者文化の光芒』（日本経済新聞社、1995）における「団塊の世代」論を補足の意味で紹介しておきたい。岩間によると、団塊の世代を特徴付けるキー・ワードは、ずばり「消費・抵抗・感性」である（同書、46頁）。つまり、団塊の世代は、“商品によって自己を表現する”“自己表現としての消費”というライフスタイルをとった最初の世代であること。政治的な異議申し立てはもちろんのことながら、あらゆる領域において旧世代や戦前的な価値に対する抵抗精神を発揮したこと。また、自分の感性にフィットするものしか受け入れないという「フィーリング」優先の態度こそが、この世代を特徴づけるのだという。感性中心主義の「フィーリング世代」への言及は、上記井上論文にも見られるので、これらの特性の指摘はきわめて妥当なものと思われる。

(2)「シラケ世代」論

1970年代末の若者論・若者文化論は、アパシー論、モラトリアム論の隆盛と特徴づけることが出来るだろう。アパシー（スチューデント・アパシー）論の火付け役となったのは、精神科医の笠原嘉が書いた『青年期』（中央公論社、1977年）である。笠原は1970年代半ば以降特に目立ち始めた留年生の存在に注目する。そして、それまでの留年とは違って、理由がはっきりしない、しかも長期の留年が増え始めたという新しい傾向に気づいたのである。これは、全共闘世代の学生たちの就職の拒否という明確な理由をもった留年とは、明らかに異質なものである[7]。

笠原は、彼らを“現代のオブローモフたち”と名付けた。オブローモフというのは、ロシアの小説家ゴンチャロフの作品『オブローモフ』（1859）の主人公の名前である。彼は地主の青年で、善意と才能を持ちながらも無気力・無為の生活を送っている。この19世紀のロシアの小説の主人公にこれらの長期留年の大学生たちの姿が重なって見えたのである。

スチューデント・アパシーに陥った彼らは、確かに「無気力」「無感動」な「疎外されたれた学生」「意欲減退学生」ではあるが、彼らにはある種の「やさしさ志向」が見られることにも笠原は注目している。そこには、荒々しく競争社会を生きることから身を引いたものだけに見られる「やさしさ」があるというのである（同書、96-97頁）。

また、笠原は現代青年の最大の特徴のひとつとして、「青年期延長」をあげている。“いまや青年から成人への移行点は、30歳前後にある”と考えたほうがよく、22，3歳からこの時期までを「プレ成人期」とすることを提唱している（同書、199頁）。そして、この青年期の延長をもたらした第一の要因は、日本社会に生じた「中産階層化」と「高学歴化」だとしている（同書、201頁）。

そしてなんといっても1970年代末の若者論の代表といえば、この青年期の延長の問題を前面に出した「モラトリアム論」である。モラトリアムは、周知のようにアメリカの心理学者・精神分析家E. H. エリクソンが彼のアイデンティティ論の中で提示した「心理・社会的モラトリアム」（psycho-social moratorium）の概念に由来する。モラトリアムという言葉自体は、もともとは経済用語で、経済恐慌を未然に防ぐために、債務の履行を延期する措

置（支払猶予）のことである。

青年期は、さまざまな役割実験などが許される、大人になるまでのいわば「猶予期間」である。そこで、この経済用語が心理学用語に転用されて、「心理・社会的モラトリアム」という概念が生まれたわけである。

このエリクソンの説をベースにして、1970年代末の若者論としてのモラトリアム論をリードしたのが、精神医学者の小此木啓吾の『モラトリアム人間の時代』（中央公論社、1978年）をはじめとするモラトリアムをテーマとした一連の論考である。これらによって、モラトリアムという言葉は広く一般に知られるようになり、最もポピュラーな「心理学用語」のひとつとなった。

小此木氏のモラトリアム論のポイントは、次の点にある。本来のモラトリアムというべき「古典的モラトリアム心理」は、現代社会の進展に伴い、〈半人前意識から全能感へ〉〈禁欲から解放へ〉〈修行感覚から遊び感覚へ〉〈自立への渇望から無意欲・しらけへ〉などの質的変化を含む「新しいモラトリアム心理」に取って代わられた（同書、23-26頁）。継続期間が限られているところが、モラトリアムのモラトリアムたるゆえんであるが、現代版モラトリアムではその終結すべき期限があいまいになる。ルーズなままに引き延ばされ、猶予状態が常態化する。まさに、「引き延ばされた青年期」である。こうして、本来のモラトリアムが持っていた「大人になるためのステップ」という機能が失われ、大人にならない・大人になれない若者が増えてきたというわけである。

小此木のモラトリアム論は、さらにこの「モラトリアム心理」が、若者だけではなく日本人全体の性格特性として普遍化し、現代の日本人の社会的性格にまでなっていると論じている（同書、35頁）。また、日本という国家自体がいわば「モラトリアム国家」として、自立性を欠く存在となっていることも指摘しているが、ここまで議論を拡大するとそれは心理（学）主義の行き過ぎと批判されることになるだろう。

(3)「新人類」論

1980年代の若者論は、まさに新人類論のブームというかたちであらわれた。それは、一例として、社会学者の中野収が短期間のうちに新人類ものを立て続けに出版していることでもわかる。―『まるで異星人（エイリアン）』（有斐閣、1985）、『新人類語』（ごま書房、1986）、『会社に異性人（エイリアン）がやって来た－新人類現象を読む』（講談社、1987）、『若者文化述語集』（リクルート出版、1987）。

新人類論の中身に入る前に、ここではまず新人類論流行の背景を見ておこう。“近頃の若者はどこか違うぞ!”という声が、最初に上がり始めたのは新入社員の様変わりに直面した企業の現場からだったという。「物怖じしない」「デートがあるからといって残業を断る」「同僚と付き合おうとしない」「上司が飲みに誘っても乗ってこない」「平気ですぐに会社をやめてしまう」などのそれまでのサラリーマンとは明らかに異なる行動パターンに対する先行世代の驚きと衝撃が、新人類論ブームの大きな前提としてある（小谷、1998、181頁）。

また、その驚きとオーバーラップしているのが、「おじさん」世代の不安だという指摘もある。1980年代を特徴づけるキー・ワードのひとつは、言うまでもなく「高度情報化」である。情報化の波は当然企業にも及び、職場環境は一変した。OA機器にうまく対処できない「おじさん」世代は、大きなストレスとともに脱落不安を感じたというわけである（同）。

一方、従来のサラリーマン処世術を拒否する若手社員たちは、そのようなOA機器は難なく使いこなすのである。先行世代にとって、彼らはますます理解しにくい存在となった。それらの切実な要求に対応して、マニュアル的新人類論も多数出版された[8]。

職場の行動という限定された領域以外の、新人類一般の特性として指摘されているものを次に見ておこう。―「感性的に優れている」「高感度人間・センスエリート」「目新しいも

のとメディアからの情報に依存して、人間関係を築く」「メディアへの親和性」「極度の個人主義者」「好きなものには熱中するが、嫌いなものには見向きもしない」「細部へのマニアックなこだわり」などが最大公約数的なものだろう（月刊『アクロス』編集室編・著『新人類が行く。：感性差別社会へ向けて　ニュータイプ若者論』PARCO出版、1985参照）。

ここに上げられた特性のうち、後半に上げられているものからは、誰もが容易に「オタク」を思い浮かべることが出来るだろう。それでは、新人類とオタクはどう違うのか。両者の関係はどのようにとらえたらよいのか。

この問いに対する解答は、いくつかの異なったものがあるというよりは、ひとつのものに集約できているような気がする。つまり、まず大前提としてオタクも世代的には新人類世代に含まれるということ。新人類世代には、いわば「真性新人類」というべきものと「疑似新人類」とでもいうべき者がいて、オタクは後者つまり新人類のひとつの変種・亜種的な存在だということである[9]。

それでは、真性新人類とオタクを分かつものは何か。それは、対人関係能力やコミュニケーション能力である。端的に「対人スキル」といわれることもある。前者は、その能力を使って外に向かって交友の輪を広げていくことが出来る。彼らには、「明るい」「ナウい」「センスがいい」などの形容詞が与えられる。それに対し、対人スキルを欠く後者は、対人関係が苦手でメディアとの一人遊びにこもりがちになる。彼らは、逆に「暗い」「ダサい」などといわれることになる。

一方は、「外向的」で「社交的」。他方は、「内向的」で「非社交的」。まさに対照的な性格で、両者はまさに「ポジ」と「ネガ」の関係にある。真性新人類を新人類世代の「勝ち組」、オタクを「負け組」ととらえる見方もある（宮台、1994、162-163頁）。

このように、オタクに対する評価は一般的に否定的なものが多い。オタクのマイナスイメージを決定的にしたものは言うまでもなく、1989年に明らかになった幼女連続誘拐殺人事件である。この事件の犯人のＭくんは、8畳ほどの離れに約6000本のビデオテープに囲まれて生活していた。テレビで紹介された彼の部屋の映像は、視聴者に衝撃を与えた。それは、メディアの繭（カプセル）に閉じこもるオタクの具体的な姿（プロトタイプ）として共有され、次第にオタクのステレオタイプとして広がっていくことになった[10]。

いずれにせよ、オタク的なライフスタイルは、かつては金持ちの道楽息子にしか許されないものであった。趣味や好きなものを追求することなど、一部の階層の人間にだけ許された特権であった。ところが、それがある世代に共通の代表的な特性となったのである。その意味では、オタクとはまさに豊かな社会の産物であり、若者の時代的変容を語る好事例である。

(4)「団塊ジュニア」論

1990年代に入って、団塊ジュニア世代を論じた代表的著作に社会学者宮台真司の『制服少女たちの選択』（講談社、1994）がある。制服を売る、下着を売る、援助交際という名の売春を行う－彼女たちの突出した性行動は、「良識ある大人たち」に大きなショックを与えた。性道徳の喪失と退廃を大いに嘆かせたが、彼女たちに「パンツを売って何が悪いの?」「身体を売って何が悪いの?」「誰にも迷惑なんかかけていないじゃない!」と開き直られたとき、うまく反論できる大人はいなかった。河合隼雄氏ですら、援助交際は、「たましいに悪い行為である、たましいを著しく傷つけるものだ」と言うしかなかった[11]。

こんな少女たちを生んでしまったのは、団塊の世代である親たち＝「団塊親」の子育ての失敗もひとつの要因だと宮台は指摘する。自らが既存の「絶対的価値」に異議申し立てをした団塊の世代は、「ダメなものはダメ!」という絶対的なものを子供たちに教え込むことが出来なかった。まさに、悪しき相対主義のジレンマである。そして、結果的に「なんでもあり」の状況が生まれてしまったという

のである。

しかし、これは実は「本当の理由」ではない。社会システム理論の観点から分析すれば、真の原因は日本社会自体の変容にあるというのが、宮台説のポイントだということになる。戦後の日本社会においては、地域共同体の解体に伴い、「世間」に代表される強固な規範が失われた。「近接的な確かさを支える共同体的な同一性＝近接的同一性は、世間から世代に、そしてより小さくて人為的な共同体へと次々に代替されていった」（同書、86頁）というのである。

こうした「島宇宙化」の果てに、「道徳の消滅」が訪れたというわけである。なぜなら、「道徳というのは、世間のまなざしによって自らを規範する作法」のことだからである（同書、87頁）。こう考えると、突出した性行動に象徴される彼女たちの振る舞いも、新しく主流となった「都市的状況」へのひとつの適応の形態であると理解することが出来る。日本社会の変容に伴う環境変化に彼女たちは、「適切に」対処しているだけなのだという主張になる。

おわりに

以上、非常にラフな形ではあるが、戦後の若者の歴史の概略と代表的な若者論・若者文化論の主要な論点を整理してきた。若者のメンタリティや行動の特性が、常に時代を先取りしていくことの実際の中身の一端が明らかになったと思う。また、それぞれの時代の若者論・若者文化論が何に注目し、何を強調したかも明らかになった。この若者をめぐる議論の力点の置き方自体が「時代」の変化を語っている。

社会心理の時代的変遷を明らかしようとする「社会心理史」という筆者自身の研究テーマにとって、若者という存在と若者について書かれたさまざまな議論は見逃せない。なぜなら、若者の意識や行動は常に時代を先取りするものであり、若者文化は一般の大衆文化の先駆けとなるからである。そして、若者論や若者文化論で指摘される特質は、社会全体の変化の方向や大衆文化の行方を予言してくれる。つまり、「社会心理」の変化の方向を示してくれるということである。若者論や若者文化論は恰好の素材なのである。

最後に、戦後の若者の歴史における「変わらぬもの」と「変わったもの」について短い補足をしておこう。小谷（1998）は、団塊の世代から、一貫して若者論・若者文化論の中で繰り返し取り上げられているテーマは、「モラトリアム志向」「遊戯性」「やさしさ」だったが、これらが80年代に大きな変質を遂げたことを指摘している[12)]。

さらにこれに、「消費主義的メンタリティ」「感性重視傾向」などのテーマを加えることが出来ると思う。そしてこれらの特性は、日本人全体の行動様式やメンタリティ、まさに「社会心理」の特徴のなかに一定のタイムラグを経て変容を遂げつつ、一般化・普遍化してきていると思われる。

それでは、今後の日本人の社会心理の変化を予測する「団塊ジュニア」以降の若者たちと若者文化の特性は何だろうか？　筆者も、1980年代生まれのまさに「超新人類」とでもいうべき世代の若者の特質を探る試みをしたことがある[13)]。そこで明らかになったのは、上記の諸特性は、彼らにおいてもいまだその基層部分では引き継がれているが、これに加えて、「肥大した自意識」「ゆがんだ身体感覚」などを新しい特質として付け加えることが出来るということであった。そして、何よりも顕著なのが彼らの行動を貫いている、ある種の「絶望感」であるということである。そこでは、desperateという英語のニュアンスが一番よく当てはまる「自暴自棄の振る舞い」が目立った。彼らは、まさに「閉塞の時代」の「絶望の世代」である。

これらの若者のあり方や彼らが担う若者文化から予測される未来は、当然の事ながら明るいものではない。

注

1）岩間（1995）、小谷（1998）などを参照。なお本稿の執筆に当たっては、小谷（1998）に多くを負っている。

2）小谷、1998、126頁。

3）「連帯に距離をおく」「何事にも本気ではないふりをする」をするのがこの世代の特徴であり、この点こそが先行する団塊の世代との決定的な違いであるという指摘もある（岩間、1995、83頁）。

4）このイベントでは、各流行語に対してそれぞれ「受賞者」なるものを設定するのが恒例となっているが、このとき「新人類」の代表として選ばれたのは、清原和博・工藤公康・渡辺久信という西武ライオンズの若き獅子たちであった。

5）『漫画ブリッコ』（白夜書房）1983年6月号

6）三浦（2001）は、団塊の世代の実際の結婚・出産に関するデータに基づいて、従来の定説に異論を唱え、「真性団塊ジュニア世代」を1973～1980年生まれとしている。「ブルセラ」「援交」の問題が顕在化してくるのが、1990年代初めであることを考えてみても三浦説の方が現実に合致していると言えよう。

7）全共闘世代にもすでに、アパシー的症状を示す学生がいたことについての記述もある。

8）清水勤『「新人類」採用・教育マニュアル』（朝日出版社、1986）、根本孝『新人類vs管理者』（中央経済社、1987）、扇谷正造責任編集『新人類がやってきた!：管理職のための若者大研究』（PHP研究所、1987）、岩崎隆治『職場と若者たち：新人類の活かし方』（日本労働協会、1988）。

9）大規模な調査から、若者の類型を導き出した事例もある。そこに登場するのは、「ミーハー普通人」「先端的高感度人間」「ネクラ的ラガード」「バンカラ風さわやか人間」「アンバランスなスペシャリスト」（以上1985年調査）、「ミーハー自信家」「ネクラ的ラガード」「友人よりかかり人間」「バンカラ風さわやか人間」「頭のいいニヒリスト」（以上1986年調査）である。ネーミングからだけでも、各タイプの特性が推測できるが、詳細は宮台（1994）及び岩間（1995）を参照。

10）しかし、こんなエピソードもある。Mくんの部屋の映像を見た「本物のオタク」が、目ざとく一本のビデオテープの背に書かれた文字に注目して、「Mくんはオタクではない！」と異論を唱えたというのである。そこには、アニメのタイトルとピンクレディーの文字が書かれていた。本物のオタクだったら、このように違うジャンルのものを同じ一本のテープに録画することなどないというのである。マニアにとっては、分類は命だというわけである。

11）「日本人の心のゆくえ　第9回　『援助交際』というムーブメント」『世界』岩波書店、1997年3月号）。

12）小谷、1989、187-190頁参照。なお、「やさしさ」の変容については、大平（1995）に詳しい。

13）市川（1999）、市川（2000）参照。

参考文献

市川孝一、1999、「現代若者考：『視線平気症』とケータイ文化」『生活科学研究』第21号（文教大学生活科学研究所）

――――、2000、「若者のファッションから見えてくるもの－“三厚娘“の社会生態学」『生活科学研究』第22号（文教大学生活科学研究所）

井上　俊、1973、『死にがいの喪失』筑摩書房

岩間夏樹、1995、『戦後若者文化の光芒』日本経済新聞社

小此木啓吾、1978、『モラトリアム人間の時代』中央公論社

――――、1979、『モラトリアム人間の心理構造』中央公論社

大平　健、1995、『やさしさの精神病理』岩波書店

笠原　嘉、1977、『青年期』中央公論社

香山リカ、2002、『若者の法則』岩波書店

小谷　敏（編）、1993、『若者論を読む』世界思想社

――――、1998、『若者たちの変貌』世界思想社

武田　徹、2002、『若者はなぜ「繋がり」たがるのか』PHP研究所

中島　梓、1991、『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房

中野　収、1985、『まるで異星人（エイリアン）』有斐閣

――――、1986、『新人類語』ごま書房

――――、1987、『会社に異星人（エイリアン）がやって来た－新人類現象を読む』講談社

――――、1987、『若者文化述語集』リクルート出版

三浦　展、2001、『マイホームレス・チャイルド』クラブハウス

宮台真司、1994、『制服少女たちの選択』講談社

山田昌弘、1999、『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房